



Let's build up the NHK Symphony
“O・R・C・H・E・S・T・R・A”.

- Orchestra
- Rule
- Conductor
- History
- Ensemble
- Sound
- Ticket
- Rehearsal
- Artist

みんなで作る、
N響の“ORCHESTRA”

#01 ○ = Orchestra

人々が集まりハーモニーを奏でれば、それはオーケストラだ。

#02 R = Rule

コンサートを自由に楽しむためのルール。

#03 C = Conductor

作曲家の「生き様」と自分の「原体験」を演奏で表現する。

#04 H = History

挑戦を選び、進化してきたN響の歴史。

#05 E = Ensemble

息遣いや気配を感じて奏でる。

#06 S = Sound

聴衆と演奏者、両者が感じる「いい音」がある。

#07 T = Ticket

チケットは、使いこなせばもっと楽しい。

#08 R = Rehearsal

名演は、十人十色のリハーサルから。

#09 A = Artist

N響らしさを支える、日々の心構えとは。

「そもそもN響ってどんなオーケストラなの？」

「クラシックコンサートを鑑賞するにはどうすればいい？」

「コンサートには何を着ていけばいいの？」といった

いまさら聞きづらい基本的なルールから、

普段なかなか見ることのできないリハーサルの裏側や、楽員の心構えまで、

「O・R・C・H・E・S・T・R・A」を頭文字にもつキーワード毎に

紹介していきます。

みんなでオーケストラをもっと自由に、

気軽に楽しんでみませんか？



「みんなで作る、
N響の“ORCHESTRA”」の
詳しい情報はこちら。

Let's build up the NHK Symphony "ORCHESTRA".



人々が集まりハーモニーを奏できれば、
それはオーケストラだ。



「オーケストラ」は演奏する機会によって、曲のジャンル、奏者の人数、楽器の編成が異なりますが、そもそもオーケストラを構成する条件はあるのでしょうか。歴史を遡りながら考えてみました。

オーケストラの起源は、
原始時代まで遡る。

一般的に「オーケストラ」とは、「楽器を演奏する人たちが集まったグループ」のことを指します。少ない人数のオーケストラは「室内管弦楽団（チェンバーオーケストラ）」などと言われることも多いですが、普通のオーケストラも室内で演奏しますから、その定義は曖昧なところ

があります。

「バンド」と「オーケストラ」の違いもそう。いわゆる「クラシックミュージック」ではない、ジャズやポップス、ロックなどを演奏する集団のことを一般的に「バンド」と言いますが、人数で線引きするのは困難です。ジャズには「ビッグバンド」という大編成のアンサンブルがありますが、バッハやハイドンらが活躍したバロック時代のオーケストラもそのくらいの人数でした。

オーケストラの語源を調べてみると、もともと古代ギリシャの劇場で舞台と客席の間にある土間の部分を「オルケストラ」と呼んでいたのですが、そこにいる演奏者の集団をいつしか「オーケストラ」と呼ぶようになったといわれています。もちろん、古代ギリシャよりはるか以前から



ギリシャにあるエピダウロス遺跡の円形劇場。紀元前4世紀に建てられ、今もおクラシックコンサートやバレエなどが開かれる。写真中央の円形の部分が「オルケストラ」。

時には、お客さんと一緒に
音楽を奏でる。

N響が演奏した中でもとりわけユニークだったのは、パウル・ヒンデミットのヴィオラ協奏曲の一つ《白鳥を焼く男》です。これはヴィオラ独奏を聞き取りやすくするために、ヴァイオリンとヴィオラを省いた特異な楽器編成でした。他にも、打楽器オーケストラとピアノ4台、合唱、独唱のみで編成されたカール・オルフの《カトゥリ・カルミナ》を披露したことがありました。また、中国出身の指揮者で作曲家のタン・ドゥンが来日した時は、あらかじめスマホにダウンロードした音源をお客さんと一緒に鳴らす、彼が作曲した通称「スマホ協奏曲」（正式名称は、Passacaglia: Secret of Wind and Birds）なるものをN響で「演奏」したことも話題となりました。

ポップスに比べてクラシックは「ハードルが高い」と言われがちですが、民衆の中から生まれた「ポピュラーミュージック（大衆音楽）」と「クラシック」は、お互いに影響を与え合いながら進化してきました。理論や技法など意識せずとも、まずは感じるままに聴いてみてはいかがでしょうか。その先にはきっと奥深い世界が待っています。

人々は集まって音を奏でていました。自分たちの「声」以外ですと、まずは何かモノを「叩く」ことで音を出していたようです。そうやって叩いたり吹いたり、時には擦ったりしながら人間はいろいろな楽器を開発していきました。「声」だけでなく楽器も使ってハーモニーを奏でるようになり、それがやがて「オーケストラ」になったわけです。

構築して、破壊する
オーケストラのスタイル。

現在世界中に存在するオーケストラは、大体19世紀半ばくらいに確立したスタイルで演奏されています。作曲家でいうと、シューマンやブラームスあたり。「この楽曲にはこの楽器が何人必要」というふうに作曲家が指定するようになったのは、おそらく18世紀半ば以降のモーツァルトやベートーヴェンの頃からでしょう。例えばモーツァルトは、同じ楽曲でも編成の違いによって楽譜を書き分けるなどしています。

ブラームス以降の音楽は、既存の価値観を覆したり、破壊したりする動きになっていく。例えば、「気持ちいい和声なんていない」「12音階である必要性もない」「そもそも和音である必要があるのか？」というふうに。

2014年1月25日NHKホールで行われた、第1774回定期公演Aプログラムでのカール・オルフ《カトゥリ・カルミナ》演奏の様子。指揮はファビオ・ルイーゼ。



#02 Rule

コンサートを自由に楽しむための ルール。

コンサートを自由に楽しむためにも、「ルール」は大切。服装や拍手のタイミングなどクラシックコンサートにまつわる不安を解消して、心置きなくクラシック音楽に没頭しましょう。



RULE 1

ドレスでも、和服でも、もちろん普段着でも。

クラシックのコンサートと聞くと、フォーマルな場所というイメージを持つ方もいるかもしれません。通常のコンサートの場合、「ドレスコード」などは特にありません。N響公演のお客様を見ていると、やや綺麗なカジュアルの方が多く印象です。もちろんラフな格好の方や仕事終わりのスーツ姿の方の中には和服をお召しになる方もいらっしゃいます。せっかくの演奏会なので、普段より少しおしゃれをして非日常空間を味わいながら優雅な気分で聴くのも素敵だと思います。

ただし音がする洋服やアクセサリ、見た目が不潔に感じる格好などは周りの人が演奏に集中できなくなってしまうので避けてください。大きな帽子も後ろの人が見えにくくなるので、避けるか演奏中は取りましょう。演奏中に落としたり、音がしたりするものもカバンにしまっておくことをおすすめします。



RULE 2

演奏中は入退場ができません。

クラシックのコンサートでは、演奏中の入退場はご遠慮ください。万が一開演時間に間に合わなかった場合、もし次に入場できるタイミングがあればホール係が案内してくれます。

お手洗いは開演前や休憩中に済ませるようにしましょう。ただし具合が悪くなってしまったなど、どうしても退場せざるを得ない状況になってしまった場合は、なるべく静かに出ていただき、ホール係にお知らせください。



RULE 3

眠ってしまったときは、くれぐれもお静かに。

クラシック音楽にはリラクゼーション効果もあるため、気持ち良くなって眠ってしまうこともきつとあると思います。寝てしまうのは悪いことではないのですが、いびきをかいたり、こっくりこっくりしたりすると奏者や他のお客様が気になってしまうので、そこは気をつけたいところです。もしお連れの方がそうなら、そっと起こしてあげてくださいね。



RULE 4

演奏者を拍手で応援しよう。

クラシックコンサート初心者の方にとって、迷うのは「拍手のタイミング」ではないでしょうか。コンサートの様子などをテレビで観ていると、演奏が終わっても拍手をしない時がたまにあり、「実際の会場ではどう振る舞えばいいの？」という方もいらっしゃるかもしれません。

まず、演奏者が登場したら大きな拍手で迎えてあげてください。大きな拍手があると、演奏者も気分が高まります。そして、楽曲が終わったら拍手を贈りましょう。ただし交響曲の楽章間や、何曲かが続いている組曲や曲集などは、すべての曲が終わるまで拍手をしないのが一般的です。

演奏の後は最後の音が鳴り終わっても、指揮者が緊張を解くまで演奏は続いていると考えてください。タイミングがわからない時は、周りの反応を見てそれに従うのが良いでしょう。

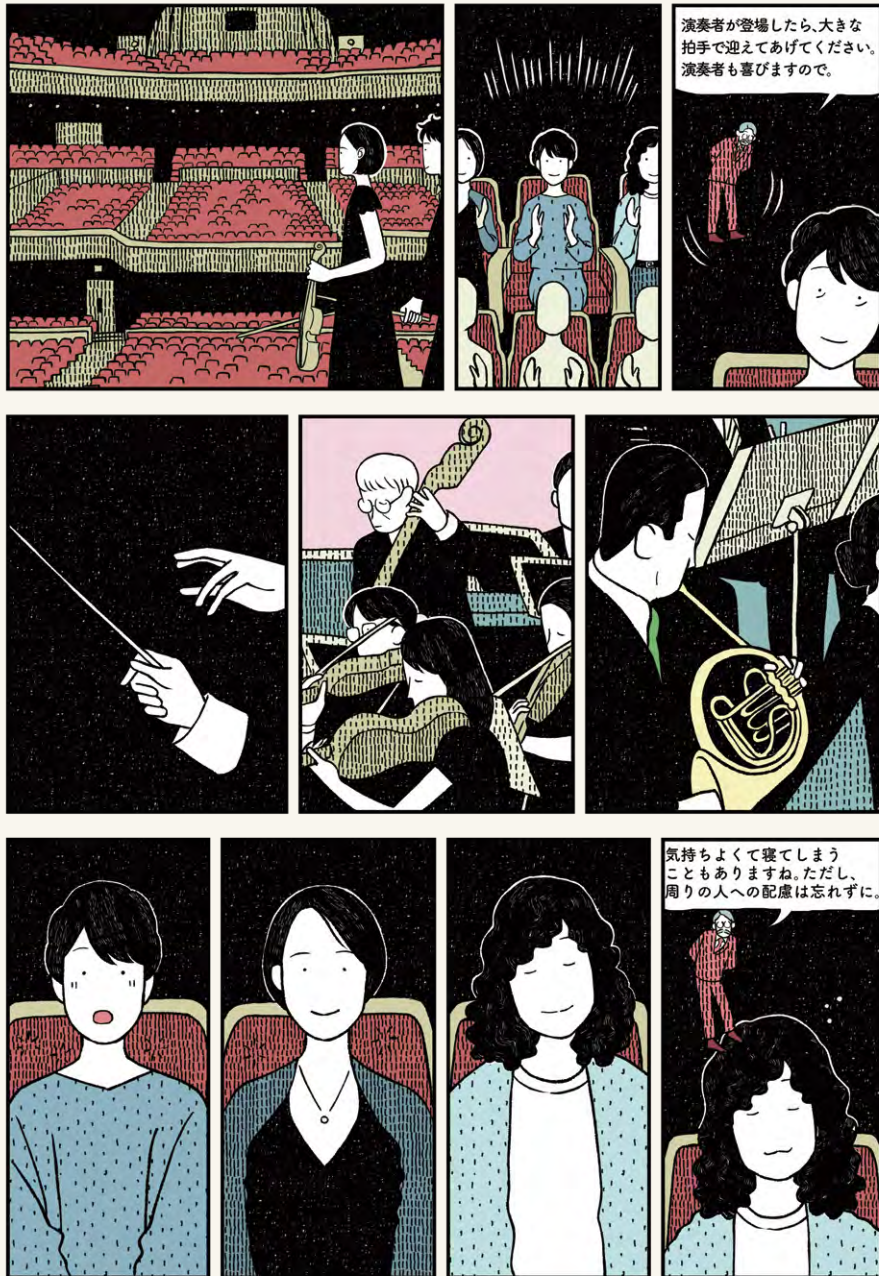


RULE 5

みんなで楽しむための注意事項を確認しよう。

- 演奏や周りのお客様の鑑賞の妨げにならないよう、公演中は音の出る機器の設定をオフにしましょう。演奏中のおしゃべりはもちろんのこと、ビニール袋や手荷物につけている鈴などはカバンにしまうなど音が出ないようにし、のど飴などの包み紙を開ける場合は、静かにお願いします。咳やくしゃみは、ハンカチを口元に当てると音がかなり抑えられます。
- 身を乗り出した姿勢やリズムに合わせた動きなども、周りの方の視覚を妨げていることもありますので気をつけましょう。
- 演奏中の写真や動画の撮影、録音はお断りのところがほとんどです。プログラムや場内掲示、アナウンスなどを確認しましょう。ちなみにN響主催公演ではコンサート終演時に限り、舞台上のカーテンコールを撮影していただけます。ほかのお客様の映り込みやフラッシュにはご注意ください。

—はじめてクラシックコンサートへ足を運ぶことになった幼馴染の女性3人組。胸を高鳴らせる彼女たちですが、装いから鑑賞スタイル、拍手の仕方まで、何もかも分からないことだらけ。そこに、ちょっとお節介な妖精がやってきて……。3人のはじめてのコンサート体験を覗いてみました。note『みんなのN響アワー』では、他の話も公開中です。



Let's build up the NHK Symphony "ORCHESTRA".



#03 Conductor

作曲家の「生き様」と自分の「原体験」を演奏で表現する。



2022年9月よりN響の首席指揮者に就任した、ファビオ・ルイージ。©Sylvia Elzafon

ステージの中央に立ち、全身を使いタクトを振る「指揮者」。彼らの役割や個性の違いなどに注目すると、クラシックコンサートの楽しみは倍増します。

指揮者それぞれの「原体験」が、演奏に色をつける。

指揮者とは、大まかにいえば「その日の演奏を受け持つ人」です。指揮台に立ち、指揮棒を振りながらオーケストラに対して始まりの合図と終わりの合図を出す、これがもっとも基本的な役割となります。

クラシック音楽は「再現芸術」と言われる

ように、作曲者が遺した楽譜を可能な限り忠実に再現することが求められます。と同時に、指揮者には楽譜には書かれていないこと、楽譜には書ききれなかったことを「妄想」しながら再現するセンスも必要とされるのです。

指揮者によって演奏に差が出てくるのは、この楽譜に書かれていない部分をどう解釈するかの違いによるところが大きいです。例えばテンポの取り方や、音を鳴らしたり切ったりするタイミング、強弱の具合など、指揮者の「解釈」による違いが、曲全体の印象をまるっきり変えてしまいます。クレッシェンドをする場所が、ほんの少しずれただけでも聞こえ方はまるで違うのです。10分の1、100分の1秒の音の長さの

2015年9月から2022年8月までN響の首席指揮者を務め、現在は名誉指揮者のパヴォ・ヤルヴィ。
©Lorraine Wauters



違いが、曲全体にも大きく影響するといっても過言ではありません。その「違い」が理解できるようになってくると、クラシック音楽を聴く楽しさは倍増するはずだ。

それぞれのオーラをまとう、名指揮者たち。

N響にこれまで出演した中でも、レジェンドと呼ばれる歴代の指揮者といえば、やはりヘルベルト・フォン・カラヤン¹やウォルフガング・サヴァリッシュ²、ホルスト・シュタイン³、ロリン・マゼール⁴あたりは外せないでしょう。すでに逝去された方たちです。残念ながら私たちはもう2度と「体験」することは出来ません。

今の時代の若手の指揮者ですと、トゥガン・ソヒエフ⁵の指揮は「一見の価値あり」です。演奏者が「すごい」と感じる指揮者は、知識があってクレヴァーである人、あるいは親分肌でグイグイ引っ張ってくれる人、もしくは「何がすごいのかよくわからないけどすごい」と思わせるオーラがある人。ソヒエフの場合、知識もあるし物腰は柔らかいのに、有無を言わせぬパワーを感じます。

2022年9月からN響の首席指揮者に就任したファビオ・ルイージももちろん素晴らしい指揮者です。クレヴァーですが下積みも長く、経験と知識に裏打ちされた説得力があります。素晴らしい指揮者は誰もが、「この人と音楽をやっているこの時間は、なんて幸せなのだろう」と演奏者に思わせる力を持っているのです。

「指揮者」を観て、聴くためには。

コンサート会場で、指揮者を観察するのもっとも適しているのは、指揮者を正面から見える席です。そこで指揮者の顔や仕草を見ていると、きっと飽きません。また、指揮者の違いをそうした見た目ではなく「音」で楽しむのであれば、オーケストラの各楽器の音量バランスに耳を傾けてみてください。どの楽器をどのくらい鳴らすか、和声の中のどの音をどのくらいの割合で出すか、それらをコントロールするのが指揮者としてもっとも重要な仕事です。そこから自分の好みの指揮者を見つけるようになってくると、クラシックの深い森にさらに一步踏み込むことになるでしょう。

N響タイトル指揮者が語る
「教えて、指揮者のみなさん。」



- ¹ オーストリア出身の指揮者(1908-1989)。20世紀のクラシック音楽界で著名な人物のひとり。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の終身指揮者・芸術監督を34年間務めた。N響には54年と57年に客演。
- ² ドイツ出身の指揮者(1923-2013)。ピアニストとしても活躍。N響には64年以降、幾度となく客演し、67年に名誉指揮者、94年に桂冠名誉指揮者となった。
- ³ ドイツ出身の指揮者(1928-2008)。ドイツ音楽の伝統を受け継ぐ指揮者として地位を築いた。N響には73年から客演し、75年に名誉指揮者となった。
- ⁴ アメリカ出身の指揮者(1930-2014)。幼少期より音楽的才能を発揮する。ヴァイオリニストから指揮者になり、様々な有名楽団の音楽監督を歴任。N響とは2012年に共演。
- ⁵ ソビエト出身の指揮者(1977-)。世界のオーケストラと共演を続ける気鋭の若手指揮者。N響には08年に客演して以降、数々の名演を残している。

#04 History

挑戦を選び、進化してきた N響の歴史。

NHK交響楽団の前身である「新交響楽団」が設立されたのは、今からおよそ100年前。その長きにわたる「歴史」の中から、N響が躍進するきっかけとなったターニングポイントについて紹介していきます。

鍛錬の場で築かれたN響の礎。

もともとN響は「新交響楽団」（新響）として1926年にスタートした楽団です。新響の歴史に最初のターニングポイントが訪れたのは、それからおよそ10年後。ポーランド生まれの指揮者ジョセフ・ローゼンストック¹を専任指揮者として迎えた時です。彼のハードなトレーニングにより、新響は日本を代表するオーケストラの一つとして躍進することになります。

1942年に新響は「財団法人日本交響楽団（日響）」と改称したのち、第二次世界大戦終結後の1951年にNHKの支援を受けて「NHK交響楽団（N響）」という名称に。放送局と結びついたことは、N響をお茶の間に広く知ってもらえる大きなきっかけとなりました。

中でもN響がその名を世界に知らしめたのは、1960年9月1日から開催されたNHK放送開始35周年記念「世界一周演奏旅行」です。まずはインドからスタートしたこの公演は、その後ソ連を巡り、ヨーロッパを経由したのちアメリカへ。たった2ヶ月で24都市を回るといふ、今の労働条件では考えられないプロジェクトでしたが、その模様をイギリスでは公共放送BBCが報じるなど世界中で大きな話題を集めました。

続いてのターニングポイントは、ウォルフガ

ング・サヴァリッシュが名誉指揮者に就任した1967年です。オットマール・スウィートナー（1973年）やホルスト・シュタイン（1975年）ら、綺羅星のような指揮者がN響にやってくるようになったのも、サヴァリッシュがN響を育てたからといえるでしょう。

「ドイツ的なスタイル」からの飛躍。

ところでN響は、ドイツで学んだ指揮者・作曲家の近衛秀麿（このえ・ひでまろ）²を中心に発足し、その後ローゼンストック、サヴァリッシュと主にドイツ出身の指揮者を招聘してきました。そのため音の構築も、低い音から高い音へと積み上げていくドイツ的なスタイルを持っていました。それを大きく変えたのが、スイス出身でフランス音楽に精通したシャルル・デュトワ。1996年に常任指揮者、そして1998年にN響はじめて以来初めての「音楽監督」のポストにデュトワが就いたことにより、N響のレパートリーは一気に広がったのです。

一流の指揮者たちと、進化し続ける。

ローゼンストックに始まり、現在のファビオ・ルイージまで、N響は世界のトップクラスの指揮者を招聘し、彼らの要求に応えられる楽団として進化してきました。N響はこれからも「日本を代表するオーケストラ」として、他の楽団と切磋琢磨しながら日本の文化に貢献していきたいと思っています。

1927年 2月 20日

新交響楽団が第1回定期公演を開催。指揮は近衛秀麿。



1942年 4月

「財団法人日本交響楽団（日響）」に改称。

1951年 8月

「NHK交響楽団（N響）」に改称。

1956年 8月

ジョセフ・ローゼンストックが専任指揮者に就任。



¹ ポーランド出身の指揮者（1895-1985）。1936～1946年まで専任指揮者として日本に在住。「新交響楽団」から「日本交響楽団」にかけてのN響創成期に、オーケストラのレベルアップに多大な貢献を果たした。1951年からは名誉指揮者の称号が与えられ、1956～1957年には常任指揮者として1年間滞在。1977年がN響との最後の共演となった。

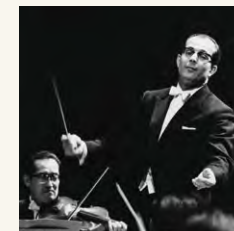
1960年 9月 1日～11月 1日

NHK放送開始35周年記念「世界一周演奏旅行」を開催。写真は、1960年9月28日にミラノ・スカラ座で演奏する様子。指揮は岩城宏之、ピアノは園田高弘。音源はSpotifyなどで配信中。



1967年 1月

ウォルフガング・サヴァリッシュが名誉指揮者に就任。



1998年 9月

シャルル・デュトワが音楽監督に就任。



2022年 9月

ファビオ・ルイージが首席指揮者に就任。

² 指揮者・作曲家（1898-1973）。ヨーロッパで指揮や作曲を学び、帰国後は「この道」や「赤とんぼ」などで知られる作曲家で指揮者の山田耕筰と協力し、「日本交響楽協会」を設立。後に山田と袂を分かち、N響の前身となる「新交響楽団」を設立した。新交響楽団退任後も欧米で指揮者として活躍し、第二次大戦後は指揮活動とともに、新しいオーケストラの設立や運営にも携わった。

Ensemble

息遣いや気配を感じて奏でる。



クラシック音楽のみならず、あらゆる音楽で大切な「アンサンブル」。いいアンサンブルとは何か。そしてN響はどのようなアンサンブルを意識しながら、日々演奏に臨んでいるのでしょうか。

楽器も奏法も異なる楽器が形成する、ひとつの音。

「アンサンブル (ensemble)」という言葉はフランス語で「一緒に」という意味です。「Tu veux qu'on dine ensemble? (一緒にご飯食べる?)」など日常的に使われており、音楽用語

としては「一緒に音を出す」つまり「合奏する」という意味になります。

アンサンブルはメロディライン、それを支える低音パート、その中間で和声を決する楽器たちによって成り立っています。アンサンブルの良し悪しは、例えば「タイミングがあっているかどうか?」や「音程やチューニングは正確であるか?」、あるいは「音の強弱のバランスは的確かどうか?」など色々な要素が複合して決まります。演奏の出だしが揃っていなかったり、チューニングがずれていて和音が濁ったり、メロディラインよりも低音パートの方が大きな音だったら、楽曲として成り立ちません。

またオーケストラで使われる楽器は、複数の奏法を持つものが多く存在します。例えばヴァイオリンは、弦を弾（はじ）くこともあれば、弓で擦ることもあるように。管楽器の場合は、木管楽器はリードと呼ばれる薄片を振動させて音を出し、金管楽器は唇を振動させて音を出します。このように様々な奏法を持つ複数の楽器が、同時に音を出してアンサンブルを形成していくわけです。

チーム全体の姿勢が、アンサンブルの良し悪しを決める。

優れたアンサンブルに必要な要素として、「方向性を共有している」ということもあります。「こういう演奏を目指している」「ここに向けて演奏を盛り上げていく」という考えがメンバー全員一致していることがとても大切です。周りの

演奏家がどんな演奏をしているのか、このオーケストラは全体でどこに行こうとしているのか。それを聴くアンテナを各自が持っていることは不可欠。他のメンバーの主張にもリスペクトをはらいつつ、オーケストラ全体のことを考える。そういう姿勢が必要となるのです。

ちなみにN響のアンサンブルは、日本トップレベルであると自負しています。各々の向上心がとても強く、しかも「仲が良い」ことも重要なポイント。電話くらいしかなかった以前と比べ、メールやLINEなどコミュニケーションツールが進化したのも大きく貢献しているのは確かです。それによって、楽員同士の結束力は30年前よりいまの方が強くなったのではないのでしょうか。

オーケストラの演奏を聴きに行く際は、演奏家たちが息を合わせてアンサンブルを奏でている様子に是非とも耳を傾けてみてください。



#06 Sound

聴衆と演奏者、 両者が感じる「いい音」がある。

オーケストラの演奏にとって、コンサートホールの「音響」はとても重要なもの。日本に存在するクラシック専用のコンサートホールはどのような考えのもとで設計され、それによってどのような音の響きが生まれるのでしょうか。

機能が違うふたつのコンサートホール。

東京初のクラシック音楽専用コンサートホールは、1986年に開館したサントリーホールです。それまで東京のコンサートホールといえば、上野にあるクラシック音楽の殿堂、オペラの聖地「東京文化会館」が有名でした。1961年4月にオープンした東京文化会館は、ステージがあって、大道具や照明なども設置することが可能な、いわゆる「多目的ホール」。オーケストラの演奏だけでなくオペラや演劇、ポップスのコンサートなども上演できる場所です。一方サントリーホールは、多目的ホール^{どんちよう}にとって必要不可欠である場面転換の機能も^{どんちよう}必要ない、クラシック音楽コンサートに特化したホールだったので。

目指すべき、いい音とは。

コンサートホールにとって必要なのは、「いい音」が鳴ることです。しかしその「いい音」とは何か。聞かれて正確に答えられる人などいないでしょう。身も蓋もないことを言えば、「いい音」に正解などないのです。例えば「クリアな音」「迫力のある音」など、音には様々な表現方法がありますが、そこに何か基準があるわけではなく、かなり感覚的な意味合いを含んで使われることが多い。結局、

いい音とは「豊かな音」、しかも同時に「クリアな音」である必要があると思います。

ホールの音響は、
演奏のクオリティにも影響する。

優れた音響のためにはホールの設計だけでなく、「音源」も重要な要素です。ここでいう「音源」とは、すなわちオーケストラによる演奏のこと。どれだけ素晴らしい音響施設があっても、そこにオーケストラがなければ「音」はないわけです。音源の良し悪しは、当然ながら「良い音かどうか？」に影響を及ぼします。しかも、演奏の出来不出来のメカニズムは音響設計よりも複雑。逆にいえば、演奏者にとって良い音響であればパフォーマンスも上がりますし、聴き手は「いい音響」の中の、「いい演奏」が楽しめる。結果的に、そのコンサートホールは「いい音」ということになりますね。

それぞれのオーケストラの違いは、単に演奏が上手いか下手かということだけではありません。ホールの音響とオーケストラのクオリティは切っても切れない関係です。現在、東京には前述のサントリーホールやN響の拠点であるNHKホールを筆頭に、東京芸術劇場、東京オペラシティ、オーチャードホール、すみだトリフォニーホールなどたくさんのコンサートホールが存在します。つまり、ホールとオーケストラの様々な組み合わせを楽しめる状況にあるわけです。ぜひともご自身の耳で「音の違い」を確かめてみてください。



〈サントリーホール〉
大ホール
1986年10月に開館。正面の大きなオルガンも特徴的な大ホールは、2階テラス席、客席数2006席。N響では、定期公演Bプログラムの会場として使用。●東京都港区赤坂1-13-1
写真提供：サントリーホール



〈東京文化会館〉
大ホール
1961年4月に開館。オペラやバレエなども開催される大ホールは、4層バルコニー、客席数2303席。N響では、特別公演の会場として使用すること。●東京都台東区上野公園5-45
写真提供：東京文化会館



〈NHKホール〉
1973年に開館し、改修工事の後2022年7月にリニューアルオープン。2層バルコニー建て、客席数3601席。N響では、A・Cプログラムの会場として使用。●東京都渋谷区神南2-2-1

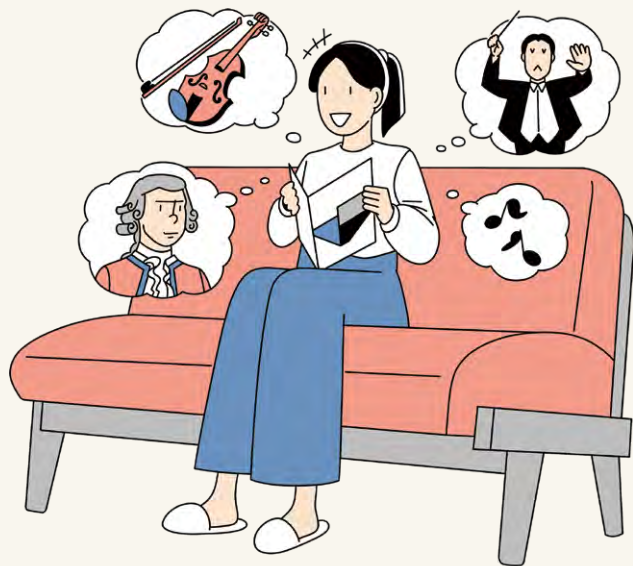
Let's build up the NHK Symphony "Orchestra".

#07 Ticket

チケットは、 使いこなせばもっと楽しい。

N響の「チケット」は、種類もたくさんあり、購入方法もさまざま。

用途や頻度から自分にぴったりのチケットを選んで、クラシックコンサート体験をはじめましょう。



N響は、どのような公演を行っているの？

3日に1度の頻度になるほど、毎月かなりの数の公演を行っています。つまり、思い立ったときにいつでも観られるのがN響コンサートなのです。年間120公演のうち、54回がN響の演奏活動の大きな柱となる「定期公演」です。定期公演は、「Aプログラム」「Bプログラム」「Cプログラム」の3種類があり、プログラムの内容や特徴もさまざまです。



Aプログラム @ NHKホール

N響が国内外の最高峰の指揮者やソリストと多彩な曲目をお送りするプログラム。オーケストラ音楽の醍醐味を存分に味わえます。またNHKホールのスケールの大きさを生かした、声楽入りの作品や大編成の曲目が並ぶのもAプログラムならではの特色です。



Bプログラム @ サントリーホール

日本を代表するクラシックの殿堂、サントリーホールでお届けするプログラム。モーツァルト、ベートーヴェン、ブラームスなど大作曲家の有名曲を中心に、国際的な指揮者やソリストとともにクオリティの高い演奏をお送りします。



Cプログラム @ NHKホール

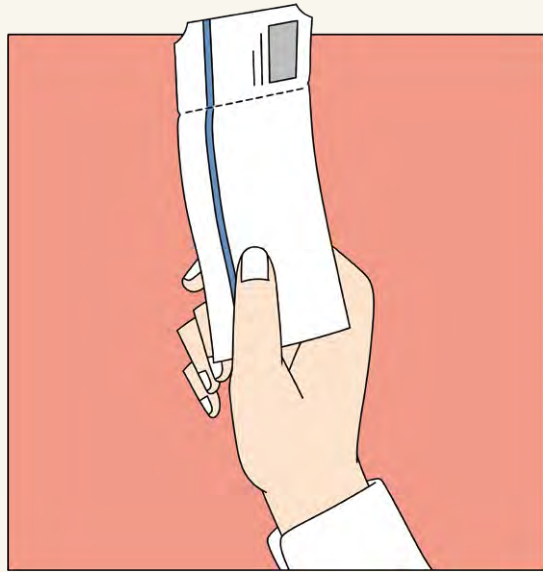
2021年からスタートした、演奏時間を60~80分程度にした休憩なしのコンパクトな内容のプログラム。Cプログラム限定でN響メンバーによる「開演前の室内楽」があり、仕事帰りにも寄っていただけるようにと、1日金曜日の開演時刻は19時30分です。国内外の最高峰の指揮者たちと贈る、選りすぐりの傑作をお楽しみいただけます。



特別公演

定期公演とは違った、さまざまな趣向を凝らした演奏会が特別公演です。年末恒例の「ベートーヴェン『第9』演奏会」、夏休み中の学生やファミリーを対象とした「ほっとコンサート」、現代作品を集めた「Music Tomorrow」、夏の名曲コンサート「N響『夏』」など、多彩な内容をN響が自ら主催して開催しています。

Let's build up the NHK Symphony "ORCHESTRAL".



チケットは、どんな種類があるの？

1 回券

一度、クラシック音楽を「体験」してみたい方へ。
「ちょっと、クラシックのコンサートを聴きに行ってみたいな」と思いN響のWEBサイトを開いていただくと、必ずどこかでコンサートが開催されています。ですので、思いついたらまずは1回券。気軽にコンサートへ足を運んでください。



「1回券」について

ユース チケット

25歳以下の方、必見です。
N響では、「若い世代の方々にクラシック音楽を楽しんでいただきたい」という思いから、25歳以下の方に購入いただける「ユースチケット」をご用意。定期公演の場合、全券種で割引率が50%以上というお得な料金設定です。例えば、CプログラムのEランクという座席なら800円で鑑賞いただけます。



「ユースチケット」について

定期 会員券

1年間どっぷりと、N響に浸かれます。
定期公演のA、B、Cの中から選択したプログラム・曜日で、会員期間中は毎回同じ座席でお楽しみいただけます。料金は1回券に比べ、シーズン会員は10%以上、年間会員は15%以上もお得です。また定期会員の方は、他の定期公演や特別公演の先行発売も利用可能。一般の方よりも早く、しかも会員割引価格でお買い求めいただけます。



「定期会員券」について



チケットは、どこで買えるの？

N響が主催する公演のチケット購入方法は、以下をご案内しております。チケットの種類に応じて購入方法が異なりますので、詳しくはN響ホームページでご確認ください。

N響ガイド

N響が運営するチケットセンターに、お電話でお申し込み・お問い合わせいただく方法です。

2023年6月27日まで 03-5793-8161

2023年6月29日から 0570-02-9502



「N響ガイド」について

WEBチケット N響

N響が運営するチケット販売サイトです。N響主催公演のチケットを、インターネットでお申し込みいただけます。N響のホームページからアクセスしてください。



「チケットのお申し込み」について

その他の 前売所

チケットぴあ、イープラス、ローソンチケットなど、その他の前売所でもチケットをお買い求めいただけます。各サイトにて、「NHK交響楽団」と検索してみてください。

#08 Rehearsal

名演は、十人十色のリハーサルから。

どのオーケストラでも行われている「リハーサル」ですが、その内容や進め方は楽団、指揮者によっても様々。N響では楽員たちが、日々どのようなリハーサルを行なっているのでしょうか。

楽譜の出版社から楽器の配置まで細かく確認。

コンサートのスケジュールや演目が決まってから、実際の公演日までの期間は数ヶ月～数年と、その公演内容によって違います。著名な指揮者や演奏者を海外から招聘する場合や、オペラのような大掛かりな公演の場合は、かなり早くから準備を始めていることも。リハーサルの準備は、まず使用する楽譜の出版社などを指揮者と確認することから始まります。どの楽譜を使うのかが決まると、練習1か月前までには演奏者が閲覧できるよう準備し、並行してオーケストラの配置の確認作業も進められます。

数日間で、音楽を創造し、すり合わせる。

実際のリハーサルは、通常は公演の2、3日前から始まる場合がほとんどです。オペラなどの大規模な曲の場合でも、長くて1週間～2週間程度。「意外と短い!」と思った方も多いのではないのでしょうか。

リハーサルは、事前に練習したことや音楽的なアイデアなどを指揮者とオーケストラ全体で確認してすり合わせていく時間です。「練習をする時間」ではなく、「音楽を創造する時間」



首席指揮者ファビオ・ルイーザのリハーサル風景。

といったイメージでしょうか。練習の目的の1つとして、オーケストラと指揮者がお互いの考えに耳を傾け合うということが挙げられます。例えば、それぞれのオーケストラには代々引き継がれている楽譜があります。特に有名な楽曲に関しては試行錯誤の上で演奏されてきた歴史があり、2026年に創立100周年を迎えるN響は、その蓄えも多いと言えるかもしれません。もちろん、初めて演奏する楽曲の場合にはその蓄積がないこともあります。リハーサルはその蓄積と指揮者の考えをすり合わせる『場』でもあるわけです。

例えば、舞台上で聴こえている音のバランスと、客席で聴こえるバランスは会場によっても違ってくるため、リハーサルやゲネプロ（本番前の通し稽古）で全体の音のバランスを確認します。音量だけでなく、音の立ち上がりのタイミングも舞台上と客席とは違って聴こえることがあります。舞台上ではちょうど良いタイミングで聴こえていても、客席では遅れていて、逆に舞台上ですれて聴こえていても客席では合って聴

こえるといった現象も。こうした「聴感上のずれ」を修正していくのもリハーサルの目的なのです。

マエストロが変われば、リハーサルの内容も変わる。

リハーサルの進め方は、指揮者によっても異なります。進め方や内容によって練習の形は多種多様です。まず全曲を通して演奏しもう一

度最初から確認していく指揮者もいれば、初めから何度も止めながら細かく演奏を詰めていく指揮者もいます。彼らは奏法、バランス、イメージなど多くのことをリハーサルで伝えようとします。その伝え方も、指揮者によって様々。同じオーケストラが同じ曲を演奏しても、指揮者が変わるとまったく違うサウンドに聴こえるのは、それぞれが自分専用の「音のパレット」を持っているからでしょう。

上：N響桂冠名誉指揮者を務めるヘルベルト・ブロムシュテット。
下：名誉指揮者のパーヴォ・ヤルヴィ。



Let's build up the NHK Symphony "ORCHESTRAL"

#09 Artist

N響らしさを支える、 日々の心構えとは。

オーケストラの「楽員」というものは、公演時以外の姿はなかなか見られないもの。普段は見られない練習時の姿や、彼らがアーティストとして意識していることはどのようなことなのでしょう。

自分に最適な 「準備の仕方」を知っている。

楽員が100人以上所属するオーケストラとなると、本番に向けての「準備の仕方」も100通りあると言っても過言ではありません。2ヶ月くらい先に演奏する予定の曲を、リハーサル空き時間に練習する人もいれば、リハーサル開始

の近いプログラムを集中して練習する人もいます。ただし毎週のように違うプログラムが控えているため、楽員は先々の公演の曲目を把握しつつ準備を常にしています。

個人練習の方法は、曲にもよります。N響としてすでに何度も演奏している曲もあれば、初めて演奏する曲もありますが、基本的にはその曲をよく知ることが大切です。自分のパートだけ弾けるようになれば良いわけではなく、曲全体の中で自分はどのような役割を担っているのか、他のパートがどんな動きをしているのかを把握しておかなければなりません。その上で、難しい箇所があれば、そこを取り出して何度も練習するなどテクニカルな部分を極めていく。



Let's build up the NHK Symphony "Orchestra".

そういった準備が整ったところで、初日のリハーサルを迎えます。

アーティストとしての自覚は、 発言から健康管理にまで。

たとえ演奏をしていない時であっても、N響の楽員として見られていることはかなり意識して生活を送らなければなりません。何かを発言するにしても、それを受け取る人は「N響の楽員が言っていること」というふうにつまみ食いするわけですから。そして、演奏に支障が出ないように体調管理も必要ですが、健康上のトラブルは誰しもあり得るし、そのような時は楽員同士でできる限りカバーし合うようにしています。

変化し続けるグルーブ感が N響らしさ。

「クラシック演奏家はクラシックばかり聴いている」と思われる方もいらっしゃるようですが、意外とそうでもありません。ベートーヴェンや

モーツァルトのシンフォニーであっても、ブラームスやハイドンであっても、グルーブ（ノリ）をどう捉えるか、どういうグルーブで演奏するかが非常に大切です。「心地よいグルーブを見つけている」のはどのジャンルの音楽にも共通していること。であれば、普段から様々なジャンルの音楽を聴くことが、より豊かな演奏を引き出し「N響らしいグルーブ」の追及につながるというでしょう。

ジャズやポップスは、同じ曲でも例えばコード進行を変えたり楽器編成を変えたり、自由にアレンジを加えることで変化してきました。それに対しクラシック音楽は、楽譜そのものは数百年前からずっと変わることなく現代まで引き継がれ、それを演奏する指揮者やオーケストラの解釈によって聞こえ方がまるで違うものになります。その「違い」を楽しむことも、クラシック音楽の醍醐味の一つなのではないでしょうか。



Let's build up the NHK Symphony "ORCHESTRA".

publication NHK Symphony Orchestra, Tokyo
 coordination Ito Research Institute Inc.
 printing Nagano & Printers Inc.
 photo CALELABO / Takeo Kobayashi (cover)
 Eduardus Lee (P.22, 23)

text Takanori Kuroda
 cooperation #1 Orchestra Hiroaki Kanda
 #3 Conductor Fuminori Maro Shinozaki
 #4 History Tamio Kano
 #5 Ensemble Kenji Matsumoto
 #6 Sound Yasuhisa Toyota
 #8 Rehearsal Akito Hiraishi / Hiroe Yukawa
 #9 Artist Yuya Minorikawa
 comic #2 Rule Yuu Mori
 illustration #7 Ticket Kouhei Miyazaki

note.nhkso.or.jp
nhkso.or.jp

Follow us on :     

©NHK Symphony Orchestra, Tokyo 2023
 All rights reserved

